

5. 広場の評価について

5. 広場の評価について

広場空間をより良いものにするためには、広場予定地が想定する広場機能に適した立地特性・空間特性にあるか、また、広場計画内容が意図したような機能・役割を発揮しうるかどうかなど、その空間の実態を把握・評価したうえで、整備・改善策を検討することが大切である。

そのため本章では、3章で示したような観測調査やその他のICTデータなど、客観的なデータを基にした広場の評価方法を検討した。

5-1. 評価基準

(1) 評価の考え方

- 広場では多様な活動が生まれており、広場の賑わいを評価するのに画一的な定量的手法は向いていない。そこで、本調査では、幅広く現象を捉えられるよう、定性的な評価手法を利用する。
- 本評価手法は、他手法に多くみられるような空間的・外形的な条件によるものではなく、そこで行われているアクティビティにより評価を行う。
- 評価は、
 - ①現れる行動の多様性、②利用者の多様性、③利用者数・利用時間、④周辺との関係性に着目して行う。
- なお、①行動の多様性とは、行動の社会性（社会活動）・任意性（任意活動／必要活動）の度合いに応じた評価基準である（下図）。

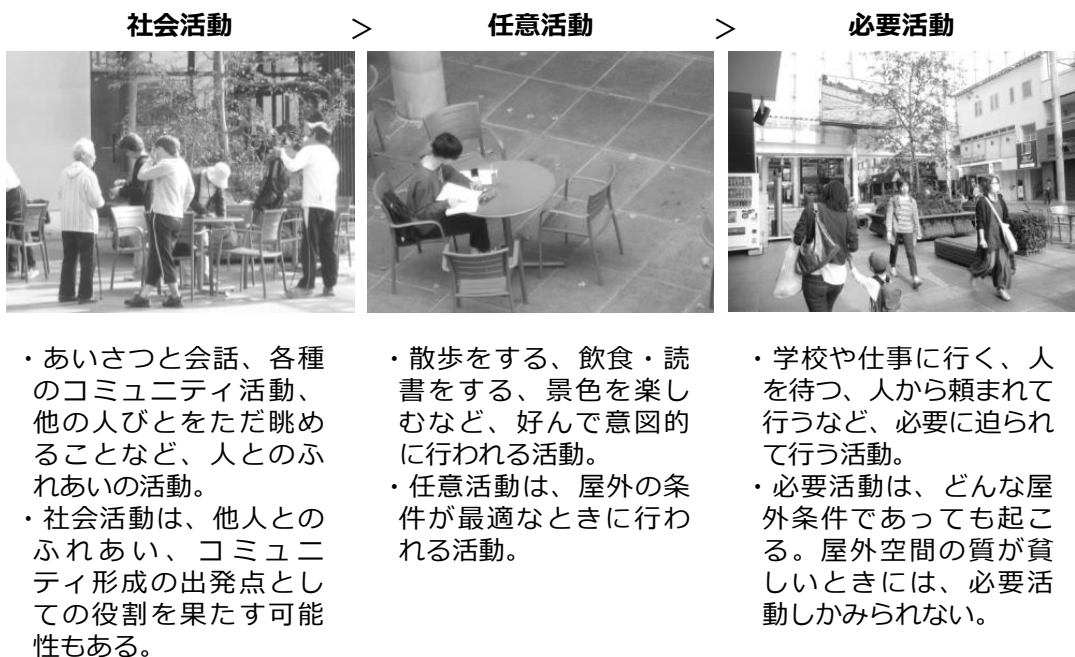


図 5-1-1 活動の種類

(2) 評価基準の説明

◆ 行動の多様性に関して

A 好ましい	B	要改善 C
<ul style="list-style-type: none">● 知らない者同士がちょっとした会話やアイコンタクトする様子が見られる● 子供の遊ぶ様子を他の利用者が眺めるなど、見る/見られるという関係がある	<ul style="list-style-type: none">● 本を読むなど楽しんで時間を過ごす人がいる● 飲食している人がいる● 短時間利用と長時間利用が混在する	<ul style="list-style-type: none">● 特定の行動（煙草を吸う、スケボーをする、など）に限定されている● 滞留行動があまりない。

◆ 利用者の多様性に関して

A 好ましい	B	要改善 C
<ul style="list-style-type: none">● あらゆる年齢層、性別、属性の利用者が混在する。● 女性の利用者が多い。● 観光客と市民の両方の利用者が共存する。	<ul style="list-style-type: none">● グループの利用者が多い。● 時間帯によって、異なる属性の利用が見られる。● 仕事、買物など、異なる目的での移動途中に使われている。	<ul style="list-style-type: none">● 特定の利用者層（若者のみ、高齢者のみ、など）に限られる。● 女性の利用者が少ない。● 常に特定の人が長時間にわたって占有している。

◆ 利用者数・利用時間に関して

A 好ましい	B	要改善 C
<ul style="list-style-type: none">● 平日も休日も、常に利用者がある状態になっている。● イベント時以外の通常時にも、一定の利用がある。	<ul style="list-style-type: none">● 平日のランチタイムや夕方、休日の昼間など、周囲の人通りが多い時間に利用者が増える。● イベント時に多数の人が集まる。	<ul style="list-style-type: none">● 周辺の人通りに比べて、常に利用者が少ない。● 全く誰もいない状態が多く見られる。

◆ 周辺との関係性に関して

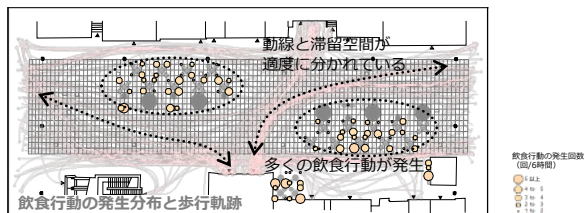
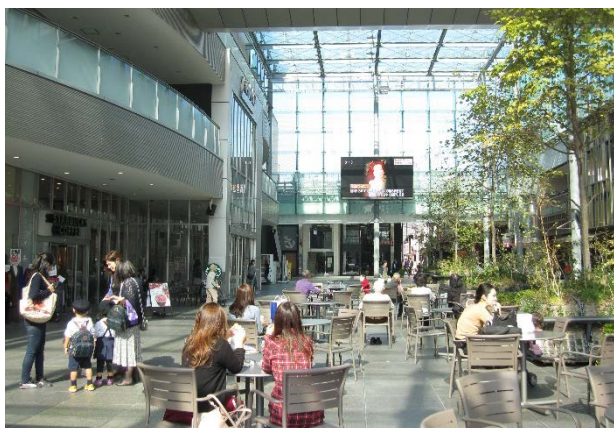
A 好ましい	B	要改善 C
<ul style="list-style-type: none">● 近隣の店舗で買ったものを広場で飲食する。● 買い物後に広場に立寄り、また別の店舗を回遊しはじめる。	<ul style="list-style-type: none">● 広場を経由することで周辺を便利に移動できる。● 移動中に休憩したり、待ち合わせしたりできる。● 広場沿い店舗の利用が促進される。	<ul style="list-style-type: none">● 広場の存在が周辺の歩行の妨げになっている。● 広場によってエリアの印象の低下を招いている。

※ A（好ましい）評価の場合には、利用者にとって「快適である」「居心地がいい」「会話しやすい」等の評価が得られていると考えられる。

(3) 評価の例

グランドプラザ（富山市）

類型 A（中心エリア／複数交差）
ア（かこまれ／店舗多）



「行動の多様性」に関して

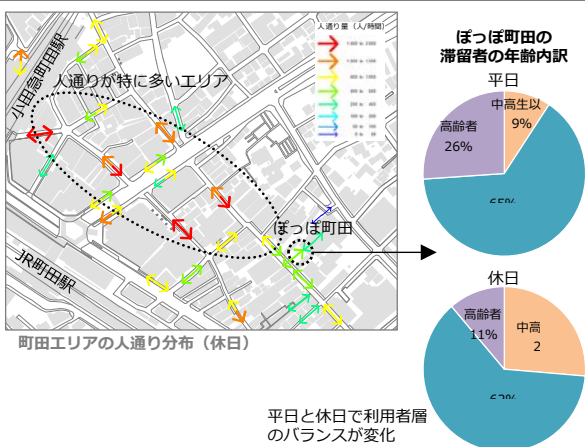
- 広場に別々に訪れた人たちがあいさつを交わしたり、会話している様子が見られる。
- 小さな子供が遊ぶためのスペースが設けられており、遊ぶ子供たちを眺めながら休憩しているお年寄りが多く見られる。
- 本を読む、飲食する、仕事をする、犬の散歩をする、仮眠をとるなど様々なアクティビティが見られる。

評価



ぼっぼ町田（町田市）

類型 C（中心エリア／一本）
ア（かこまれ／店舗多）



「利用者の多様性」に関して

- 広場は駅周辺の人通りの多いエリアの端部に位置するが、平日・休日ともに多くの人で賑わっている。
- 平日は飲食などをしながらゆっくり過ごす高齢者層の人が多く見られる。一方で、休日は中学生以下の子供も多く見られるなど、多様な年齢層に利用されている。

評価



香林坊アトリオ広場（金沢市）

類型 C（中心エリア／一本）
ウ（かこまれ／店舗少）

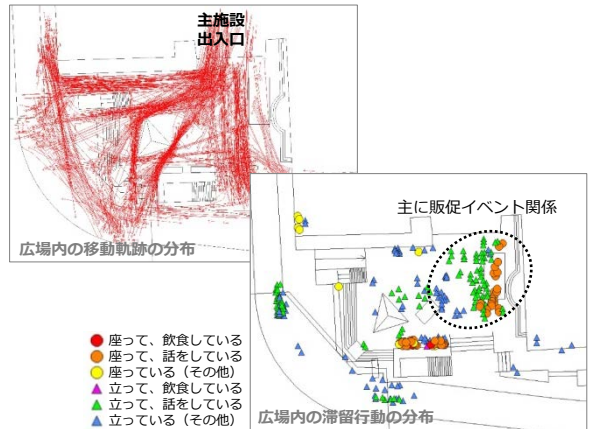
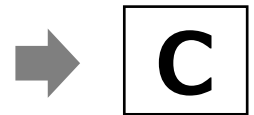


図 5-1-4 広場利用の様子

「利用者数」に関して

- 広場周辺の人通りは多く、広場に面している商業施設に出入りする人は多いなど、人が集まりやすい条件にあるが、休憩できる場所が少なく、広場利用者（滞留者）は少ない。
- ⇒ 建物壁面を活用した囲まれ感のある滞留空間、人通りを眺められる座席配置など、居心地の良い滞留空間の形成が大切。また、商業施設の催事や近くの商店街のイベント広場としての活用も考えられる。

評価



北条ポケットパーク広場（小田原市）

類型 A（中心エリア／複数交差）
イ（さらされ／店舗多）

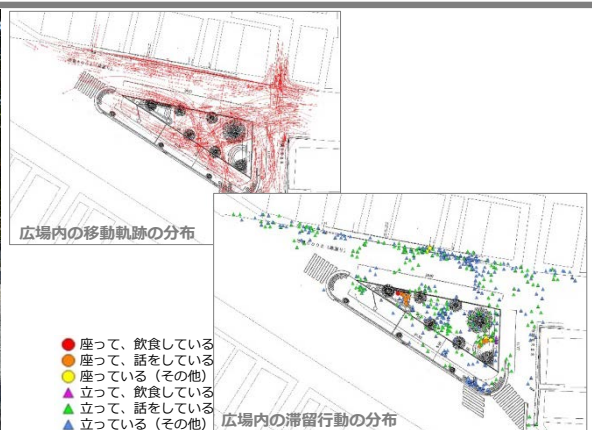


図 5-1-5 広場利用の様子

「周辺との関係」に関して

- 以前は建物があった場所が広場になった空間であり、広場を経由することで周辺を便利に移動できる。
- ただし、テイクアウトしたものを食べるような滞留行動はあまり見られず、街の回遊行動を活性化する機能を十分に果たしていないと考えられる。

⇒ 開放性を活かしつつ気軽に立ち止まれる滞留空間、座席の配置等により、日常的に歩行者が立寄り、滞留する場所を目指すことが考えられる。

評価



5-2. 各種データを活用した評価方法

- 広場に関しては、広域的なスケールから身体的なスケールに至るまで様々な活動が生まれ、またその状況は常に変化することから、広場の賑わいを評価する際には多面的な評価手法が求められる。そのため、単一のデータや観測手法を用いるだけでは不十分である。
- そこで本調査では、活用可能なデータとして、「ICTデータ」から得られる定量的な情報と、「その他の観測的手法」から得られる定性的な情報を取り上げ、特徴の整理を行った。
- その上で、広場来訪者の多様な行動特性を捉えることを目的として、各種データの相互補完的な関係性を整理し、広場空間の整備に役立つ「広場空間の行動特性把握・評価手法」について整理を行った。

(1) 活用データの例

- ICTデータとしては、近年、幅広く情報提供や情報の活用が進みつつある「携帯電話基地局データ」、「携帯電話GPSデータ」、「ビーコンによる取得データ」を対象とする。
- その他の観測手法によるデータとしては、現在も多くの自治体で利用されている「自動計測装置による取得データ」、「アンケート/ヒアリングによる取得データ」を対象とする。
- これらに加えて、ICTデータ、従来の自動計測装置やアンケートによるデータを補完するための「観測的手法による取得データ」について整理を行った。

表 5-2-1 活用データの概要

空間スケール	データ種類	概要
大 ↑ ICT系	(A) 携帯電話基地局データ	<ul style="list-style-type: none"> • 携帯電話基地局のエリアごとに把握される携帯電話端末の概ねの位置情報。 • 携帯電話網の運用データから性別、年代、居住地などが把握可能であり、大量のサンプルを継続的に取得可能。 • 空間解像度はそれほど高くない。
	(B) 携帯電話GPSデータ	<ul style="list-style-type: none"> • 携帯電話を保有する（許諾を経た）ユーザーのGPSデータ（緯度経度情報）。 • 性別や年齢等、位置情報以外の情報は含まれない。 • 許諾者のみに限られるため、サンプル数が多くはない。
	(C) ビーコンによる取得データ	<ul style="list-style-type: none"> • ビーコンと呼ばれる無線機器から発信される信号を利用した、屋内外の位置測位情報（ビーコンとの位置関係）。 • 被観測者の滞在時間、移動経路など詳細情報が収集可能。 • 観測範囲が、機器を設置・使用した箇所に限られる。
中 ↑ 非ICT系	(D) 自動計測装置による取得データ	<ul style="list-style-type: none"> • 赤外線センサーにより計測される歩行者通行量、CCTVなどを利用した画像解析による歩行者の行動情報。 • 特定の場所の歩行者通行量などを継続的に収集可能。 • 観測内容が、通行量に限られる。
	(E) 観測的手法による取得データ	<ul style="list-style-type: none"> • 実地での観測的な調査で得られる行動情報。 • 不規則に発生する多様な活動や、空間と活動との相互作用を詳細に記録可能。 • 多くのサンプルを確保するためには、多大な費用・時間を要する。
小	(F) アンケート/ヒアリングによる取得データ	<ul style="list-style-type: none"> • アンケート/ヒアリング調査で得られる行動情報。 • 具体的な行動の有無、行動を行った理由など、多様な情報が収集できる。 • 被観測者の主観的な情報となりやすい。また、多くのサンプルを確保するためには、多大な時間・費用を要する。

(2) 各データから得られる情報の特徴

- 「携帯電話基地局データ」や「携帯電話GPSデータ」は広域的な人の分布や流動を把握することが可能であり、近年では「店舗出店の際にどのエリアにどういった人が集中しているのか?」、「観光地に訪れている人はどこから来ているのか?」など、あるエリアの利用者特性を把握するための活用が進んでいる。しかし、両データともに位置情報の精度については未だ制約があり、広場など、小規模の特定施設内外を対象とするようなスケールの分析には向いていない。
- 一方で、「ビーコンによる取得データ」は無線通信機の信号のやり取りから比較的詳細な位置情報を把握することができるため、商業施設やイベント会場など限られた施設内を対象に活用が進んでいる。しかし、データを取得するためには、通信機器を施設各所、もしくは来訪者に携帯させる必要があるため、不特定多数の人が集まる公共空間ではサンプル数を十分に確保することが難しい。
- 様々な分野においてICTデータの活用が進む中、上記で述べた課題も一因となり、ICTデータを街なかの歩行者の行動特性の把握や、歩行者空間の課題検討などに活用することはあまり進んでいない。
- 多くの自治体で所有している街なかの歩行者行動に関する情報は、駅直近などの数カ所に限られた「自動計測装置による取得データ」や、必ずしもサンプル数が十分ではない「アンケート/ヒアリングによる取得データ」であることが多い。
- 現状では、街なかのさまざまな場所で多様に变化する歩行者の行動特性を捉えるためには、目的に応じて柔軟に方法を変更できる「観察的手法による取得データ」が有効である場合が多い。また、一つのデータに頼るのではなく、各種データのメリット・デメリットを把握したうえで、適切にいくつかのデータを活用することによって、広域的なエリア特性と多様な歩行者行動を捉えることが重要である。

表 5-2-2 各データから得られる情報比較

情報種類	広場評価との関係 (一例)	(A) 携帯電話 基地局データ	(B) 携帯電話 GPSデータ	(C) ビーコンに よる取得 データ	(D) 自動計測装置 による取得 データ	(E) 観察的手法 による取得 データ	(F) アンケート/ ヒアリングに よる取得データ
大	エリア の人通り ・広域を含む街区エリアにはどれほどの人通りが見られるか?	●	△	×	△	△	×
	周辺施設 立ち寄り状況 ・広場利用後に周辺店舗への立ち寄りが見られるか?	×	●	△	×	△	△
スケール	広場利用人数 ・広場の利用人数は?	×	×	△	○	○	×
	広場利用時間 ・広場利用者の滞留時間は?	×	○	●	●	○	○
	広場利用行動 ・広場内で滞留行動はどれだけ発生している? ・滞留中に見られる行動は?	×	×	×	×	●	○
小	属性 (年齢・性別) ・どういった年齢・性別の人が利用しているのか?	○	×	△	×	○	●
タイプ	居住地 ・利用者は周辺住民、観光客のどちらか?	○	○	△	×	×	○
その他	データ取得の 容易性 ・データ取得にかかる日数・費用は?	○	△	×	×	○	×
	データの 精度・客観性 ・取得データは十分な精度、客観性があるか?	△	△	△	○	○	×

(3) 各データのメリット・デメリット

(A) 携帯電話基地局データ

情報内容

- ・携帯電話基地局のエリアごとに所在する携帯電話の位置情報を、250mメッシュ単位で集計した人口分布情報。
- ・契約者の性別、生年月日、住所などの運用データと紐づいており、様々な観点で分析が可能。
- ・集計は特定のエリアサイズによりのみ行われるため、任意の施設内の人数や、特定サンプル（広場利用者）に絞った分析はできない。

イメージ

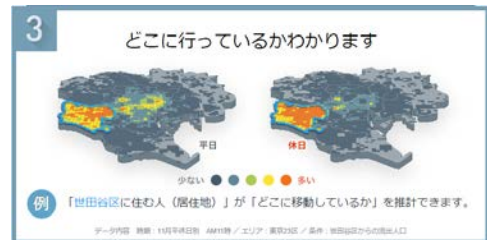


図 5-2-1 データイメージ

出典 http://www.dcmim.com/service/area_marketing/mobile_spatial_statistics/

表 5-2-3 携帯電話基地局データのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリアの人通り	●	・広域エリアの人口分布が把握可能。	-
周辺施設立ち寄り状況	×	-	・特定サンプルの行動特性は把握できない。
広場利用人数	×	-	・特定の広場空間内を指定して人数を把握することはできない。 ・歩行者と滞留者を区別して把握することができない。
広場利用時間	×	-	・広場での滞留行動など、特定行動の発生時間などは把握できない。
広場利用行動	×	-	・具体的な行動は把握できない。
属性 (年齢・性別)	○	・性別、年齢層の情報を持つため、男女別の行動特性の違いなどを分析可能	-
居住地	○	・居住地に関する情報を持つため、広場利用者が近隣住民なのか遠方からの観光客なのかなど、来訪目的について分析可能。	-
データ取得の容易性	○	・任意の日時の情報を把握可能。	・
データの精度・客観性	△	・得られるメッシュデータについては正確な情報である。	・位置情報の精度の制限により、一般的なデータ提供は250mメッシュが最小空間単位であり、広場など特定施設の情報は得られない。

(B) 携帯電話GPSデータ

情報内容

- ・携帯利用者から許諾を得て取得した位置情報を、個人を特定することができないように集計かつ統計的に加工を行った「移動に関する情報」。
- ・性別・年齢等、位置情報以外の情報は含まれない。
- ・時間経過に伴う位置情報の変化について分析が行えるため、広場利用前後の移動軌跡など、一連の行動について把握することができる。

イメージ



図 5-2-2 データイメージ

出典 <https://www.zenrin-datacom.net/business/congestion/>

表 5-2-4 携帯電話GPSデータのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリアの人通り	△	・人口の多いエリアでは有効。	・50～70万人のサンプルからエリア内人口（母数）を推計するため、人口が少ないエリアでは精度が下がる。
周辺施設立ち寄り状況	●	・広場利用の直前直後の立ち寄り場所を把握可能。	-
広場利用人数	×	-	・データサンプルの出現率が低いいため、小規模な広場の場合は、実際との誤差が生じやすい。
広場利用時間	○	・5分ごとの移動状況を把握可能。 ・特定場所での滞留時間が把握可能。	-
広場利用行動	×	-	・飲食・会話など詳細な行動は把握できない。
属性（年齢・性別）	×	-	・年齢・性別に関する情報は含まないため、利用者属性に着目した行動特性の分析はできない。
居住地	○	・居住地、勤務地の情報を含むため、広場利用者が近隣住民なのか遠方からの観光客なのかなど、来訪目的について分析可能。	-
データ取得の容易性	△	・任意の日時の情報を取得可能	・GPSデータは高額であり、比較のために広範囲・複数時刻のデータを購入するには、多くの費用が必要となる。
データの精度・客観性	△	・得られたサンプルについては正確な情報である。	・データ出現率が約250分の1であることに注意が必要。 ・中規模以下の広場は、1日の滞留者数は数百人以下であることが多く、その規模の広場を対象とした詳細な分析には不向き。

(C) ビーコンによる取得データ

情報内容

- ・ ビーコンと呼ばれる無線機器から発信される信号を利用した、屋内外の位置測位情報（ビーコンとの位置関係）。ビーコンの受信可能範囲は、端末や混雑状況に応じて数mから数十mまでのばらつきがある。
- ・ 被観測者の滞在時間、移動経路など詳細な行動情報が収集可能である。
- ・ ビーコン受信機、もしくは発信機を被観測者に携帯させる必要があるため、サンプル数を多く確保するのが難しい。

イメージ



図 5-2-3 データイメージ 出典 <http://tagcast.jp/tma/>

表 5-2-5 ビーコンデータのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリアの人通り	×	-	・ ビーコン送受信機を持った歩行者のみをカウントするため、人通りの把握は困難。
周辺施設立ち寄り状況	△	・ 通信機器を設置した施設であれば、詳細に施設への立ち寄り状況が把握できる。	・ 通信機器を設置していない施設については把握できない。 ・ 通信機器を持っていない歩行者の状況は把握できない。
広場利用人数	△	・ 広場内の各所に通信機器を設置すれば、広場内の利用者分布の状況も把握可能。	・ 広場内の正確な人数を把握するためには、来訪者全員に通信機器を携帯させる必要がある。
広場利用時間	●	・ 数秒以下の間隔で計測を行うため、詳細な広場の利用時間が把握可能。	-
広場利用行動	×	-	・ 飲食・会話など詳細な行動は把握できない。
属性 (年齢・性別)	△	・ ビーコン発信機、もしくは受信機の設定の際に任意の属性情報を追加可能。	・ ビーコン発信機、もしくは受信機の設定が必要
居住地	△	・ ビーコン発信機、もしくは受信機の設定の際に任意の情報を追加可能。	・ ビーコン発信機、もしくは受信機の設定が必要
データ取得の容易性	×	-	・ 施設への通信機器の設置、来訪者への通信機器の携帯の依頼など、広範囲で多くのサンプル数を確保するのは困難。
データの精度・客観性	△	・ 精度的には正確な情報が得られる。	・ 通信機器を被観測者に携帯させることにより、心理的影響を与える。

(D) 自動計測装置による取得データ

情報内容

- ・赤外線センサーなどにより計測される歩行者量、CCTVなどを利用した画像解析による歩行者の行動情報。
- ・特定の場所の歩行者量などを24時間365日継続的に収集可能。
- ・画像解析技術の向上、POSデータとの連動などに伴い、取得情報の幅が広がりつつある。

イメージ



図 5-2-4 観測イメージ

出典 <http://cweb.canon.jp/webview/lineup/people-counter/index.html>

表 5-2-6 自動計測装置によるデータのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリア の人通り	△	・計測装置を設置した場所については、任意の日時の情報収集が可能。	・電源の確保、盗難防止、動作確認など、設置・運用には多くの労力が必要であり、広域エリアへの複数設置は不向き。
周辺施設 立ち寄り状況	×	-	-
広場利用人数	○	・高精度に人数のカウントが可能	-
広場利用時間	●	・画像解析により各サンプルの追跡が可能であり、特定サンプルの広場内の利用時間も把握可能。	-
広場利用行動	×	-	・飲食・会話など詳細な行動は把握できない。
属性 (年齢・性別)	×	-	・一般的な画像解析では、群衆中の年齢・性別を把握することは困難。
居住地	×	-	・居住地など、見た目から判断できない情報は把握できない。
データ取得の 容易性	×	-	・センサーの設置、解析作業には多くの費用・時間が必要となる。
データの 精度・客観性	○	・精度、客観性ともに確保されている。	-

(E) 観察的手法による取得データ

情報内容

- ・ 実地での観察的な調査で得られる行動情報。不規則に発生する多様な活動を、実地で経験・観察することにより、空間とそこで生まれる活動の相互作用を詳細に記録可能。
- ・ 広域なエリアについては、一定時間（数分）に限ったサンプリング的な手法を取ることににより、エリア全体の傾向が把握可能だが、全数の把握には向いていない。

イメージ



図 5-2-5 観測の様子

表 5-2-7 観測的手法によるデータのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリアの人通り	△	・ 5分間のサンプリング的調査などによって、複数個所のデータを収集し、エリア全体の傾向を把握可能。	・ エリア内の全サンプルを対象とすることはできない。
周辺施設立ち寄り状況	△	・ 特定サンプルの行動を観察することにより、具体的な施設立ち寄り状況を把握可能。	・ 複数施設の立ち寄り状況を比較する際に、立ち寄り量の平均値や比率など、統計的な情報は厳密には把握できない。
広場利用人数	○	・ 任意の形態の広場で利用人数を把握可能。 ・ また、歩行者・滞留者別の利用人数も把握可能。	-
広場利用時間	○	・ 広場内の常時観測を行うことにより、各座席別の利用時間なども把握可能。	-
広場利用行動	●	・ 飲食、会話など多様な行動を把握可能。	-
属性 (年齢・性別)	○	・ 見た目からおおよその年齢、性別を把握可能。	-
居住地	×	-	・ 居住地など、見た目から判断できない情報は把握できない。
データ取得の容易性	○	・ 柔軟に調査手法を工夫することにより、簡易に多様な情報を取得可能。	-
データの精度・客観性	○	・ 観察的な手法にとどめることにより（被観察者に影響を与えないため）客観的なデータが取得可能。	-

(F) アンケート／ヒアリングによる取得データ

情報内容

- ・アンケート／ヒアリング調査で得られる歩行行動に関する情報。具体的な行動の有無、行動を行った理由など、さまざまな情報が収集できる。
- ・被観測者の主観的な情報となりやすい。また、多くのサンプルを確保するためには、多大な労力が必要。

イメージ



図 5-2-6 アンケートイメージ

出典 <http://www.nilim.go.jp/lab/jcg/index.files/nigiwai.pdf>

表 5-2-8 アンケート／ヒアリングによるデータのメリット・デメリット

情報種類	取得情報	メリット	デメリット
エリアの人通り	×	-	・ボリュームに関することは把握できない。
周辺施設 立ち寄り状況	△	・具体的に立ち寄り施設を把握できる。	・ヒアリング後に立ち寄った施設は把握できない。
広場利用人数	×	-	・ボリュームに関することは把握できない。
広場利用時間	○	・どこでどれだけの時間を過ごしたかなど、また、その時の心理状況など、様々な情報を把握可能。	-
広場利用行動	○	・飲食、会話など多様な行動を把握可能。	-
属性 (年齢・性別)	●	・回答者の合意が得られれば、多様な属性情報を把握可能。	-
居住地	○	・回答者の合意が得られれば、多様な属性情報を把握可能。	-
データ取得の 容易性	×	-	・広場の特性を把握するような、多くのサンプルが必要となる場合には、多くの調査員・時間が必要となる。
データの 精度・客観性	×	-	・回答者の記憶違いや主観的な判断が発生しやすく、データの正確性や客観性が確保しづらい。

(4) データの活用方法・評価方法例

- 広場は、多様な活動が生まれる場であり、広場の賑わいを評価するには画一的な手法は向いていない。他手法にみられるような空間的・外形的な条件（形状、広さ、レイアウトなど）だけに着目するのではなく、広場や広場周辺で行われている行動（アクティビティ）を評価基準とすることが、多様な賑わいを生み出すための検討につながる。
- また、広場の立地特性に応じて、適切に広場機能を設定することにより、広場による周囲への波及効果がより期待される。そのため、広場を評価する際にも、立地特性に応じた評価軸の重要性の違いに着目して評価をすることが重要である。
- 本調査では、「ICTデータ」や「他の観測手法による取得データ」を用いた、来訪者の行動特性の把握・広場空間の評価方法の過程例を整理した。評価対象としては、立地特性の異なる3タイプの疑似的な広場空間を対象とした、

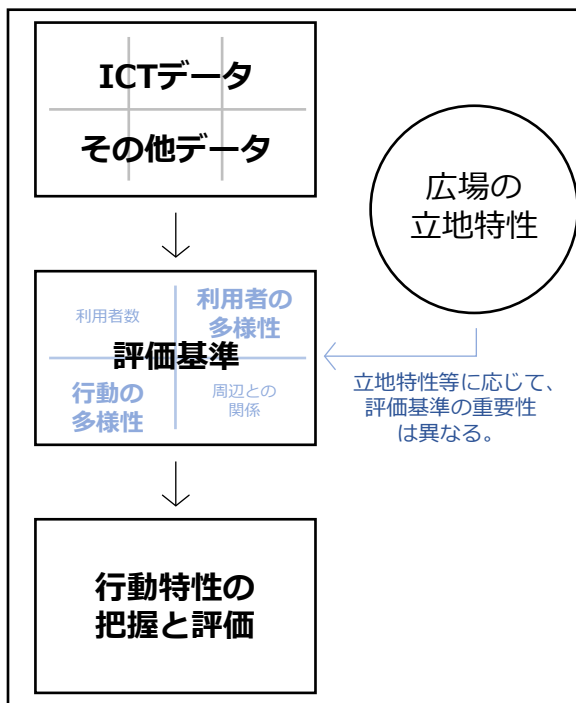


図 5-2-7 評価の流れ

アクティビティに着目した評価基準

◆ 利用者数に関して

- | A 好ましい | B | C 要改善 |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 平日も休日も、常に利用者がいる状態になっている。 イベント時以外の通常時にも、一定の利用がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 平日のランチタイムや夕方、休日の昼間など、周囲の人通りが多い時間に利用者が増える。 イベント時に多数の人が集まる。 | <ul style="list-style-type: none"> 周辺の人通りと比べて、常に利用者が少ない。 全くだれもいない状態が多く見られる。 |

◆ 利用者の多様性に関して

- | A 好ましい | B | C 要改善 |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> あらゆる年齢層、性別、属性の利用者が混在する。 女性の利用者が多い。 観光客と市民の両方の利用者が共存する。 | <ul style="list-style-type: none"> グループの利用者が多い。 時間帯によって、異なる属性の利用が見られる。 仕事、買物など、異なる目的での移動途中に使われている。 | <ul style="list-style-type: none"> 特定の利用者層（若者のみ、高齢者のみ、など）に限られる。 女性の利用者が少ない。 常に特定の人が長時間にわたって占有している。 |

◆ 行動の多様性に関して

- | A 好ましい | B | C 要改善 |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 知らない者同士がちょっとした会話やアイコンタクトする様子が見られる。 子供の遊ぶ様子を他の利用者が眺めるなど、見る/見られるという関係がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 本を読むなど楽しんで時間を過ごす人がいる。 飲食している人がいる。 短時間利用と長時間利用が混在する。 | <ul style="list-style-type: none"> 特定の行動（煙草を吸う、スケボーをする、など）に限定されている。 滞留行動があまりない。 |

◆ 周辺との関係に関して

- | A 好ましい | B | C 要改善 |
|--|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 近隣の店舗で買ったものを広場で飲食する。 買い物後に広場に立寄り、また別の店舗を回遊する。 | <ul style="list-style-type: none"> 広場を経由することで周辺を便利に移動できる。 移動途中で休憩したり待ち合わせしたりできる。 広場沿い店舗の利用が促進される。 | <ul style="list-style-type: none"> 広場の存在が周辺の歩行の妨げになっている。 広場によってエリアの印象の低下を招いている。 |

図 5-2-8 評価基準

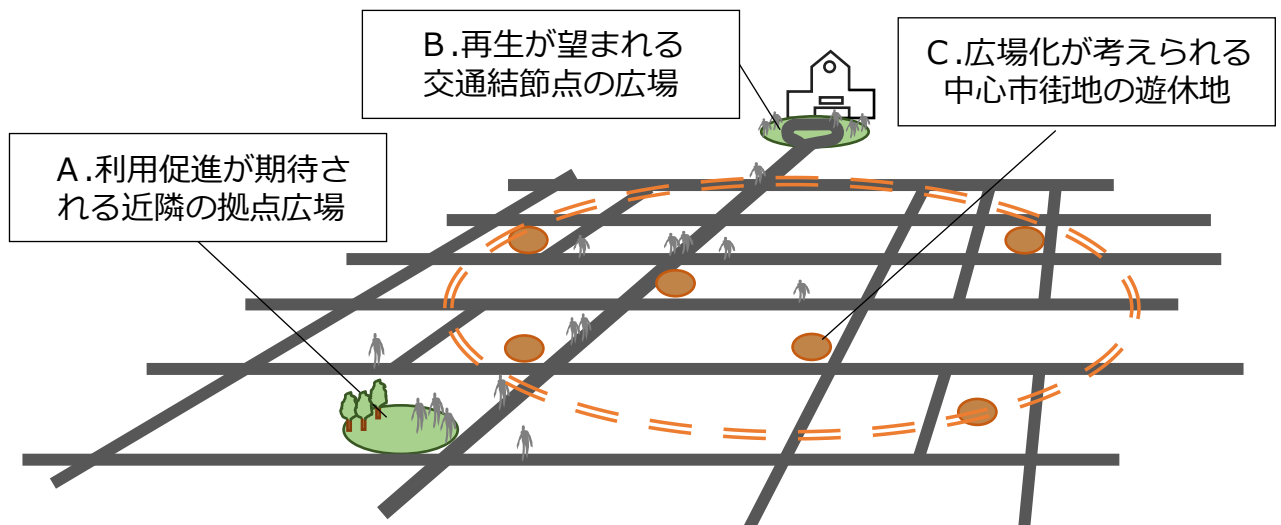


図 5-2-9 3タイプの疑似的な広場空間

パターンA：利用促進が期待される近隣の拠点広場

[問題意識・背景]

- 安全・安心なまちづくりを進めるために地域コミュニティの重要性が再認識されてきている。しかし、地域の人が自然に集まるような居心地のよい空間は少なく、街なかには利用用途が不明確でひと気のない公開空地などが多々見かけられる。
- 現況の広場の利用状況や周辺店舗の立地状況を把握し、広場の目指す方向性を適切に設定することが大切である。

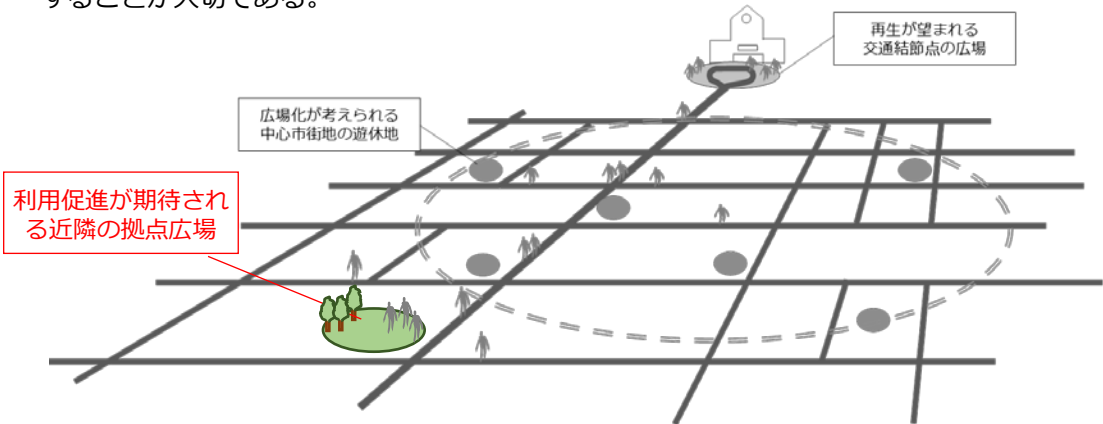


図 5-2-10 疑似的な広場空間

[着眼点]

- 広場自体の魅力度、快適性などによって行動特性が異なると考えられる。
- 近隣の店舗等の集客力によって、広場の利用価値も変化する。

[検討の視点]

- D:自動計測装置データ**を用いて、日ごと、時間帯ごとの広場の利用者数を把握する。また、**A:基地局データ**を用いて周辺エリアの人通り分布との比較を行う。
- A:基地局データ**を用いてエリアの人通り分布を把握し、**B:GPSデータ**で店舗等への立ち寄り行動の傾向を明らかにする。
- E:観察調査**による詳細な位置での正確なデータを用いて、属性や行動の多様性、周辺エリアでの回遊行動、滞留行動について把握を行う。

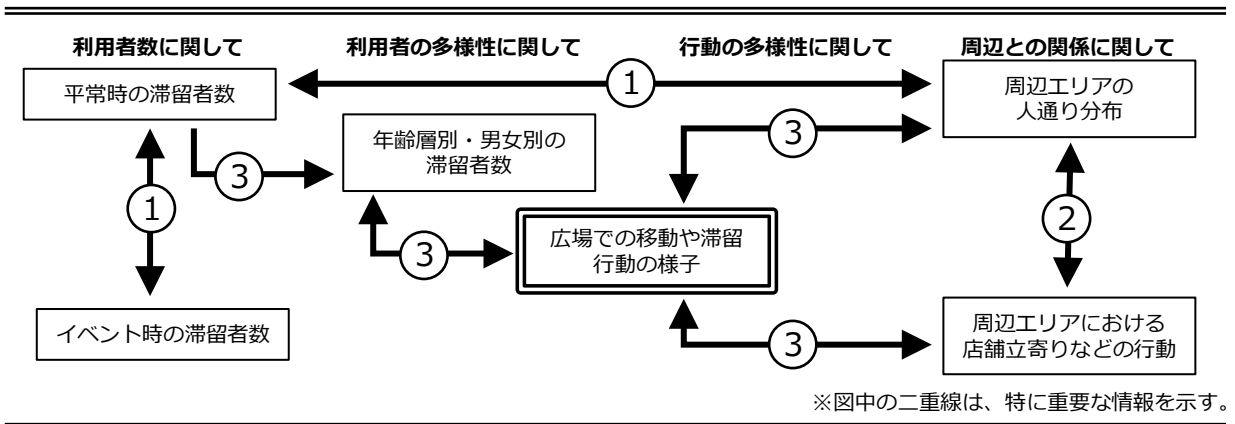


図 5-2-11 検討の流れ

パターンB：再生が望まれる交通結節点の広場

[問題意識・背景]

- 近年、衰退した中心市街地を活性化するために、交通結節点の広場を自動車優先から歩行者優先に再整備（ロータリーの縮小、歩行者空間の拡大など）する機運が高まっている。
- 交通結節点は、地元住民／観光客、買い物／通勤・通学など、さまざまな目的で多くの人々が利用するため、限られた空間を有効に活用するために、利用者特性を適切に把握することが重要である。

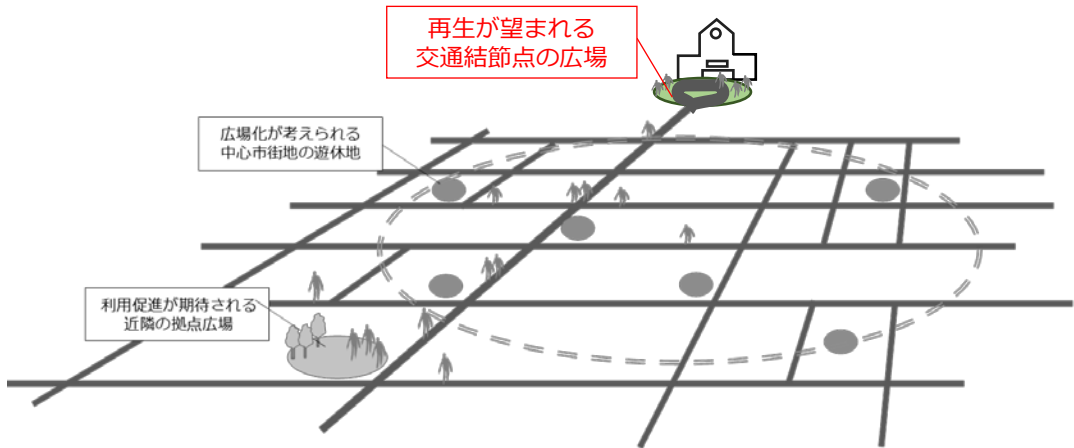


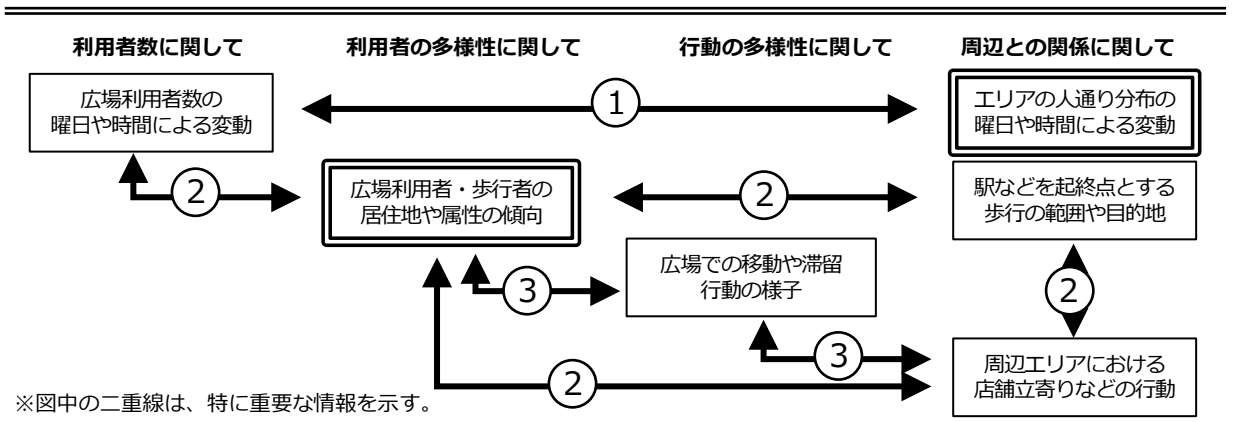
図 5-2-12 疑似的な広場空間

[着眼点]

- 駅などの周辺では曜日や時間帯によって、人々の行動特性が大きく変化する。
- 利用者の居住地や勤務地が広範に分布している可能性がある。

[検討の視点]

- ① **D:自動計測装置データ**を用いて、日ごと、時間帯ごとの広場の利用者数を把握する。また、**A:基地局データ**を用いて周辺エリアの人通り分布との比較を行う。
- ② **A:基地局データ**を用いて、広場の利用者および周辺の歩行者の居住地や属性を把握するとともに、**B:GPSデータ**を用いて、駅などを起終点とするエリア内の歩行者の行動傾向を理解する。
- ③ **E:観察調査**による詳細な位置での正確なデータを用いて、属性や行動の多様性、周辺エリアでの回遊行動、滞留行動について把握を行う。



※図中の二重線は、特に重要な情報を示す。

図 5-2-13 検討の流れ

パターンC：広場化が考えられる中心市街地の遊休地

[問題意識・背景]

- 都市の市街地においては、人口減少などに伴い土地利用や都市活動の密度が低下していくような現象（都市のスポンジ化現象）が生じており、問題視されている。
- 中心市街地の遊休地を活用する場合には、遊休地周辺エリアのポテンシャルを適切に把握して、ポテンシャルに見合った広場の規模・機能を設定することが大切である。

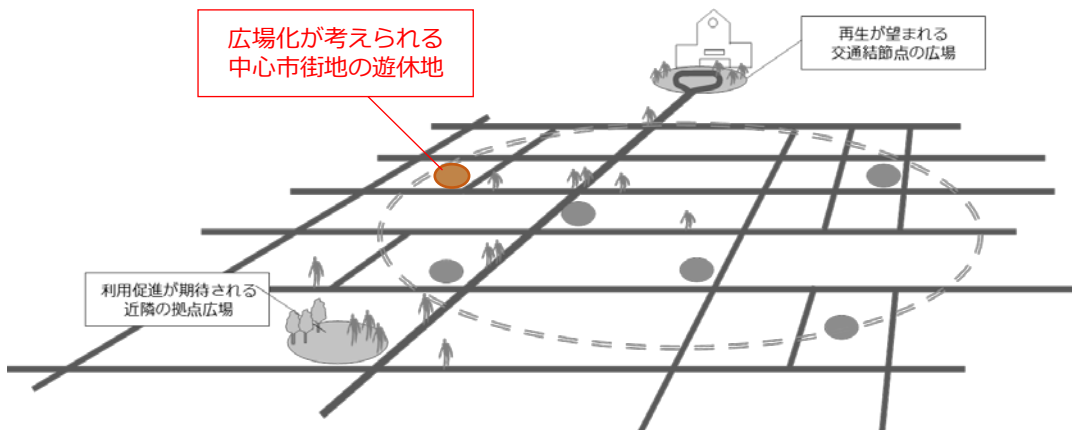


図 5-2-14 疑似的な広場空間

[着眼点]

- エリアにおける歩行者数（属性ごとの）分布や、曜日や時間帯などの変動パターンを概観することが重要。
- 歩行軌跡や立寄り地などの情報から、人々の来街目的や行動特性を類推することが求められる。

[検討の視点]

- ① **A: 基地局データ**を用いて、日ごと、時間帯ごとのエリア全体の歩行者量分布パターンを把握する。また、**B: GPSデータ**を用いて、エリア内の歩行者の行動傾向を理解する。これにより、各遊休地の立地的なポテンシャルを検討する。
- ② **E: 観察調査**のデータを用いて、周辺の広場や公共空間での移動行動や滞留行動の様子を把握する。これによって、潜在的な広場利用のニーズを類推する。

※ ①の歩行者量分布や行動傾向の把握にもE:観察調査の手法を用いることもできる（参考：賑わいづくりマニュアル）。また、行動傾向の把握については、C:ビーコンによるデータや、E:アンケート等のデータを補足的に活用することも考えられる。

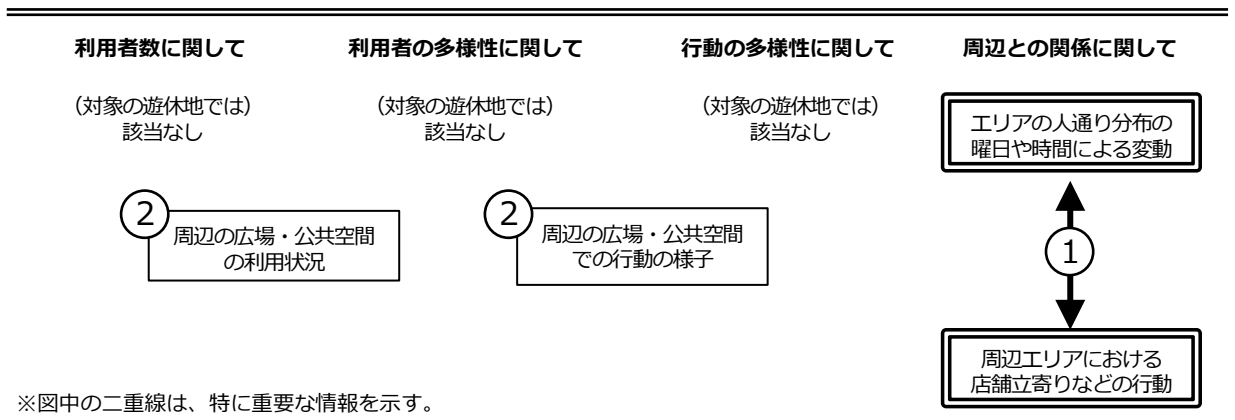


図 5-2-15 検討の流れ

